

柳は緑 花は紅

私は十数年前、人里離れた山寺で修行していました。ある日さ作務むを終え、大雨の中、全身びしょ濡れで何人かの雲水うんすいと共に山道をとぼとぼと帰っていた時の事です。小さい池のほとりを歩いていると、池の中に一輪の大きい白蓮の花が開いていました。私が呆然として見ていると、一人の先輩僧がしみじみと「まさに浄土だなあ」と言いました。

中国宋代の文人の蘇東坡そとうばという人は、柳がやわらかい緑の糸を垂れ、桃の花は紅に咲いている景色を見て「柳は緑、花は紅、真面目しんめんもく」と詠いました。

蘇東坡には、あるがまま、そのままの光景が真理の姿そのものであると直感されたのです。つまり、彼には眼の前の風景がとても尊いものに実感され、そこに全幅の信頼の心を寄せている事がうかがわれます。

草木萌えて、新緑が美しい季節です。

今まさに好時節！

今、あの時のことを思い浮かべると、先輩の雲水は、蘇東坡と同じ光景を見ていたのだらうと思います。日頃何気無く見逃している、眼の前に広がる当たり前の風景に心をよせ、じっくりと味わいましょう。

解説

蘇東坡は、中国が宋とよばれていた時代の政治家で、平素より禅に深く傾倒していました。

ここに紹介した句は「無情說法」すなわち自然の山川草木、日月星辰のようない心・意志をもたないものが宇宙の真理を説いているという理を悟った、東坡の開悟の心境が詠み込まれています。

さらさらと流れる小川であれ、緑に萌える山々であれ、空を濃く雲であれ、満天に輝く星々であれ、ことごとく我々に宇宙の真実、人生の真相を語りかけてくれています。

その説法を聴くか聴かないかは、有情の存在である我々の側にかかってきます。唐代の雲巖禪師は「無情說法は無情が聞く事を得る」と著しました。「無情たち」の声は、私達が情を取り去って初めて聴くことができるのでしょうか。

花は
みどり
魚東坡
る川ない

曹洞宗

神奈川県第二宗務所
第五教区 布教部・出版部